

左側に数年前のインド・レストランの記憶

それで天秤が平らになるだろうか

しあわせが実際に来たら

ハシが落ちたら

猫のお腹の柔らかい毛を触ったら

猫におそわれたら

そうになったら猫の価値が変わるか

右側に猫

左側に真

人が真に向き合って掴み取って

皿に置く傲慢は猫にはなかった

真の感覚を皮膚で感触して

神経に伝わってくる重さを計る

それから猫の手を手にとってスツと

塗られている背中を撫でてみる

真が粘土でできているに違いない

水で濡らして体温で温めて

私たちが評価しているものを揉んでゆく

猫 しあわせ 現金 うまい食事

竹 安全 自我 柔らかいベッド

価値の柔軟性

手のひらに重くて涼しくて

目の前にツヤツヤ明るく反射する

猫の頭を接吻してみれば

自分の価値もこのしあわせと

天秤される事実を実感する

人間の価値を決めるはずがないのに

わけがないのに

計られるわたしはその監視されている違和感と